

も敗戦のみじめさであり、長年の空白で何もかも浦島太郎のようでした。

戦後五十二年、この文を書きながら、あの大戦による多くの亡くなった戦友のことを思い、また異国の丘にて名もなく散ってゆかれた友を思う時、二度と戦争はするものでない、平和の尊さを今かみしめながら、ご冥福をお祈りいたします。

【執筆者の紹介】

筆者は大正十一年十一月五日、北比都佐村に父辰之助さん、母つねさんの二男として生まれました。北比都佐尋常高等小学校を卒業され、堀井膳写堂（近江商人）東京店に就職。

昭和十八年一月十日、現役兵として大分市西部第六八部隊に入隊。厳しい三カ月教育を受け渡満。軍隊当時は上官及び戦友の信頼も厚く、兵役に精励された。

ソ連参戦により三江省方正県方正で終戦、二十年九月入ソ。イズベストコーワヤのラーゲルで、厳寒の上地で種々の労働に服される。

二十四年七月三日舞鶴に上陸、復員。

農業を営みながら近くの酒造会社に勤勞十五年間。その後TOTO株式会社に転職、六十歳退職。農業に従事。

その間、温厚なる人柄のため人望も厚く、地域の農業組合長等を務められ、現在は必佐（北比都佐）老人クラブ副会長の職にあり、老人福祉の向上に働いておられる。家族は長男の幸一さんが頑張っておられ、孫の成長の楽しみと、なき戦友の冥福を祈りつつ、感謝の日々を送っておられる。

（滋賀県 堀江 芳郎）

抑留の労苦を踏み越えて

和歌山県 出口 為治郎

まえがき

我が国においては今から半世紀前までは、男は国民皆兵制度に従い、富国強兵を唱え、軍人として支那大

陸やアジア一帯を駆けめぐり、大日本帝国の権威を宣揚していた。私も二十歳にしてその一員となり、日本の植民地ともいべき当時の満州国、現在の中華人民共和国の東北部地域におよそ一カ年、兵員として滞りの後、昭和二十年八月中旬武装解除。ソ連邦側に拉致され、二十五日間貨車内に幽閉されシベリア鉄道を走り、下車後約二カ年重労働に従事、その待遇は奴隷同様であった。その苦難は忘れられないままにもう五十年になる。

次から述べる抑留記に、私の自分史を少し加えて、戦争の悲惨さを知らぬ子孫末代に書き残したいと思う。皆様の御判読をいただきたい。

私、出口為治郎は、日高郡野口村一、二九二番地、現在の御坊市野口一、二九〇番地において農業を営んでいた父与市、母ナカ夫婦の間に、大正十三年六月二十一日出生。兄弟姉妹十二人いた中の五人目の次男だったが、現在では女四人、男は私一人になっている。

私は昭和七年、野口尋常高等小学校に入学し、昭和

十四年三月同校を卒業後、五月に大蔵省大阪造幣局に採用されて、以来五年間を過ごし、昭和十九年退職し徴兵に応じ、第一乙種合格であった。

このころは、もう大阪の空はB29爆撃機が一日二度三度、五機十機と編隊を連ねて飛来して、各所に爆撃を加えているようだった。しかし、あれだけ数多くの攻撃を繰り返してきたのに痛むことがなかったのか、不思議に思えたものだ。ラジオや新聞での大本宮発表は支那大陸や南方方面の戦果ばかりで、内地はやられていても、国民はすべてを信じ総力を挙げて燃え立っていたことは確かだ、私も二十歳の青春時代の意気が燃え上がっている時であった。一日も早く軍人になって、あこがれの戦場へ行きたくかったのだ。

私もいよいよ出征の時が来た。昭和二十年春、和佐駅を出て九州博多港が集結地であった。九州に着いたのは夕刻で、女子青年愛国婦人会の方々が大勢出迎えてくれていた。受付、身体検査、注射、書類、新品の軍服、軍靴を受領等々、三日間滞在して出国準備をすべて整え、我々の心の備えもできた。私には満州の

広野は何となく希望する場所であった。

いよいよ今晚あたり出港だろうか、命令はもちろん秘密だ。三日目の夜中、一時ごろだったと思う、そのときはもうみんな新しい軍服に着替えて、一夜で一人前の軍人らしく形だけは整っていた。二時ごろ出港の汽笛もなく、私たちのいる船室に上官たちが出向いて船内での注意事項を伝えて、各室巡回のために出て行った。船には約二千人ぐらいは乗船しているだろう。出航して一時間ぐらいして荒波にもまれ始めた。いよいよあの有名な玄界灘。船はぐらりと大きく傾き、船内の者は我慢できずにお腹が空になるほど吐き戻していた。約二時間ぐらい大波を乗り越えて、やっと午前八時ごろ釜山港に入ることができた。釜山港はさすがに大陸に続く朝鮮半島の玄関口、規模も壮大で、一見して私のこれまでの経験と違うことを感じた。釜山駅のホームに、新しい軍服姿で心も素直に「いよいよ帝国軍人だ、国民の代表として一生懸命国のために尽くすぞ」、そんな決意で、またこの姿をせめて父と母に見てほしいなという思いが一瞬心の底をよぎった。

釜山のプラットホームを出発した。外は私には珍しい雪の広野を列車は走り続けていた。外の温度は平日零下十五度らしい。春三月というのに寒い土地柄である。朝鮮半島を縦断、走り抜けるのだからかなりの時間を必要とするであろう。朝鮮半島を四分の三ほど走り過ぎて平壤駅に到着し、ホームに降りて「飯上げ」の命令であった。ここでも朝鮮の方々、婦人会の人々の心温まる接待をいただいた。我々を見たところ一人前の軍服姿だから規則正しく行動して、発車を待つばかりとなった。市街地を過ぎて車窓より見る北鮮の山々も裸山が多くきれいな風景は少なく、外を眺めるのも味気なく思えた。

平壤から北二百キロメートルで新義州、鴨緑江オクリョクカング(ヤルー河)を挟んで対岸は満州安東である。この鮮満国境にかかる長い鉄橋を間もなく渡ることになる。架橋の当時は大変な工事であったことは想像がつく。河は凍てつく白一色であった。太陽はまさに地平線に没しようとしていた。「この広さ、やっぱり大陸だなあ」と語り合って今日一日の車中での身体を休める時を迎

えた。

もう満鉄に入ってからかなりの時間を走ってきたが、この広い土地、さっぱりわからない。もう自分たちの目的地は遠くはなからう。走り続けて三日目の午後二時ごろ、目的地と教えてもらっていたハルビン駅に着くことができた。駅も大したものだ。ホームには二、三十人もの下士官と兵たちが出迎えに来てくれていた。

部隊の営門には歩哨が二人立哨していた。営庭内には十人の交代要員が待機しており、到着した私たちの人員調べのためのようであった。やがて広い営庭に整列させられた。私たちは点呼を終わり、満州第十八野戦兵技第二六三五部隊教育隊に所属することになった。(軍歴証明、関東軍第一兵技教育隊)

点呼を終わって改めて見た営庭の広さに驚き入ったものだ。所属は大きく分かれて、自動車・弾薬と二種に分け、第一中隊と第二中隊であり、私は結局、第一中隊第一班所属となった。私のこれからの教育隊内務班での三カ月の教育を受ける心の準備はできた。いよいよ明日から出発である。

博多を出てから四日間の旅で疲れた身体を静かに寝台に横たえ、天井を眺めながら、これから始まる軍隊生活の第一夜を私の人生にとって大きな歴史の一ページとして深く心に残しておこうと瞑想しながら、哀愁を帯びた消灯ラッパの音を聞いていた。疲れのせいか、いつの間にか眠ってしまった。

初めての朝六時、起床のラッパの音に目を覚まし、素早く起きるや床上げ、着服、掃除、整頓、当番飯上げ等、朝は忙しい。さらに七時、営庭整列、点呼、朝礼、中隊長訓示等々。基本体操を終えて内務班に入り、これからが一日の始まりだ。

まず机の上に整頓箱、下着類、靴下、銃と剣、軍靴に防寒外套、防寒帽、防寒靴下などを分配されて、これの整理が大変だった。それに整頓がやかましく厳しい。休息だ、煙草を吸えと言われても時間がない。間もなく夕食ということで、古年兵の声が高くなってきた。

私たちは第一中隊第一内務班で、三十歳ぐらいの体格のいい北陸出身の班長さんだった。班は先輩は上等

兵二人、一等兵一人、計四人での指導によって教育隊の日課が始まったが、三カ月は雪ばかりであった。この年になってもあの激しかった訓練のことが思い出されるが、これは一生忘れれることはないであろう。

教育隊の訓練を終えて、私は孫呉に移されることになった。六月二十一日、先輩の上等兵に引率されて北満の孫呉に向かった。くしくもこの日は私の誕生日であった。満州の春は、日一日と見違えるほど景色が新しく生まれ変わる姿は私には珍しい現象であり、春、夏、秋の花々が競って咲き乱れて、百花爛漫。人の心を和らげるひと時であった。

一週間ほどの孫呉滞在で、またしても北安出張所への転属。ここは百人ばかり。仕事は弾薬工場での黄色火薬の溶解作業であった。北安に移ったころのニュースでは、デマ放送だと口にしないうまでも力に入ったニュースが流され、次から次へと各地での占領のことが報道されていたが、一方ではアメリカ軍が、強力な大軍をもって沖繩攻撃に集中しているということが、不思議にどこからともなく私たちの耳に流れてきていた。

そのころになってまた私たち同年兵四人は転属を命ぜられた。北安より南下して、「伊利久得」という興安嶺山中南へ三十キロメートルの地点に第十八野戦兵器廠の弾薬庫がたくさん建てられていた。そこへ到着した我々を加えて、樋口小隊長以下かなりの年配者と思われる曹長を加えて総勢十九人で、倉庫の警戒・警備のことを本務とし、百人から二百人の満人労働者達の治安維持を兼ねての服務で、九九式の実弾三十発が私の生命を守る手段であったが、幸いここにいたとき異変がなくて今の命が保たれたようにも思う。

そのころ北満は春から夏に、気温も二十度以上に上昇していた。八月に入って事情が激変してソ連軍の偵察機が盛んに飛来した。「これははっておくわけにはいかん、隊長に報告だ」として事情を伝えたところ、樋口小隊長は顔色を変えて、「我々もいよいよ出発だ、今、部隊から命令が入った、直ちに準備しろ、ソ連軍は東から北から西からと同時に侵入して攻撃をかけてきているらしく、交戦している」という連絡があった。周辺の火薬庫等を爆破したので、爆発音が終日響き渡っ

ていた。八月九日のことであった。

私たちがしばらくの間でもいた小さい兵舎なりの「思い出」に名残りを告げて、真夜中に伊利久得駅の方面に向かい出発した。小隊長以下十九人、背中につき五キログラムぐらいの食物、衣類、毛布、腰に帯剣、弾薬、手に九九式小銃等を所持し、興安嶺山中からの行軍だ。満鉄本線を伝い歩きして南下、不思議と兵隊らしい姿は見られなかった。「もう三日、四日になる。眠りたい、腹がへった」。炊事をしたくても煙が目立つのが一番困ることだから、時と場所を慎重に選んで二十人の飯盒炊きをしなければならぬ。少人数だからどのようなでもなると思うが、敵に遭遇した場合は直ちに応戦できる用意もしておかなければならない。昼間はできるだけ道に出ることを避けて小高い山中をひたすら南に向かって歩き続けた。本部からの話では、我々の結集地は海倫・綏化であったはずだが、連絡のとりのようもなく、中満富拉爾基（フルアルチともいう）地区にたどり着いた。八月十六日であった。そのときに、昨日八月十五日、日本国天皇の名においてラジオ

放送され、自らのお言葉で「詔勅」を下されて「無条件降伏を宣言」したことを知らされた。

これまで張りつめていた気持ちも一瞬腑抜けのようになつてしまった。私は六カ月間満州各地を転々と歩き回ってきて、いい研修旅行になつたと思っていたが、今のこの状態は予想もしないことであり、とうてい考えもしない結果になつてしまった。

私たちはこの世に生を受けて育てられ、日本帝国男子として「大和魂」の入った立派な男になるのだ、国のために尽くすのだ、と父や母に、あるいは先輩に、さらには数多くの恩師たちに教えられてきた。今、その私は、この地、故国を幾百里離れた遠き満州までやって来て、日本人が今日まで味わつたことのない、無念な、屈辱の日々を過ごさなければならぬかもしれない。我々はこれから一体どうなるのか、不安な日々が続く。富拉爾基の大きな陸軍病院において武装解除され、九九式小銃、弾薬、帯剣を手放した。

私たちは、あの興安嶺の山の中を出て一週間にもなるうか、ここで一日休みをとり、翌朝逐次出発するこ

とになったが、目的地など一切通達はなく、昨日と同じように、それ以上の強行軍で、落伍者はトラックに乗せられ、夕方チチハル野砲隊にたどり着いた。砲兵隊は赤レンガの建物で大きな兵舎であった。ここで中隊の編成がなされ班別までして今後の行動の態勢ができたので、当分宿泊することになった。六日頃、日本兵の全員はいよいよソ連軍の監視下に入り出発を始め、西方向二十キロメートルぐらいの、扎蘭屯^{ツァランチュン}まで行軍、小高い山草原に到着、テント張りしてまた野宿態勢に入った。野宿でも毎日使役があつて、貨車への積み込み、薪や食物等々、また貨車の修繕までさせられるなど十日間ほどの野宿で、さあ出発。列車はもっぱら西の方へ向かつて走っていた。乗り込むの一日かかった。貨車は、中央にストープが一基、上下に寝転ぶよう板で仕切られ、毛布を敷いて休む準備をした。我々の行く先は不安がつるばかりで、海拉爾^{ハイラル}を通過し満洲里を通り、日が西に沈むころにはソ連領内に入っていた。

貨車の外から鍵をかけられ、一番困るのは車内での

排便であった。越境までの所要時間は約五時間ぐらいだろうか。国境らしいところを通過して、二十数時間過ぎたところでやっと停車。今から二、三時間の停車と伝えられたのだが、まず排便の処理が始めで、飯上げ、飯盒運び、薪の積み込み、水運び等々、停車時の当番作業はめまぐるしく多忙である。そのたびにシベリアの土地を、人を眺めるのであるが、次第に我が身の悲哀をしみじみと感ずるのでした。終戦の八月十五日からもう五十日にもなる。

十月四日ころか、曆もなく正確とは言えないが、ここはチタという駅だろうか、ソ連の鉄道員が小さいランプを持って金槌で車両点検をしていた。歩哨は「ダバイ」と聞き慣れた言葉を叫んでいたが、もう気にもしない。夜中、チタ駅を出て走る走る、夜も昼もない。食事は黒パン一切れと飯盒の中蓋に八分目の粟の湯粥。山の中の杉、松の太木、その根元にいつ積もったのか、十センチぐらいの雪が積もっていた。

走る方向の右側、窓外を眺めていた同僚が突然「海だ」と叫び声を上げた。こんなところに海などあるは

「ずはないと誰かが言つて」「バイカル湖だよ」と教えてくれた。線路沿いの右手遙かかなたに見えるだけでも、いかにバイカル湖が大きいか想像もできない。バイカル湖を見ながらヒロクという町を過ぎるよと聞き、それからどれほど走つたろうか、ウランウデの街に入つた。停車して前の方から伝令で、ここで入浴。一回五十人ぐらい、またダバイダバイで追い立てられた。バ拉克建ての浴場。外は氷点下のような。待つ時間の長いこと、つらいこと。

小バケツ一杯のお湯で半年の垢は落とし切れない。こんな入浴は初めてだ。以前、チチハル野砲隊で、興安嶺の山中の小さい兵舎のときに十日ぶりに入浴をさせてもらったときの嬉しさと比べて、囚われの身の悲哀をしみじみと味わいながらの体験であった。シラミの巢、抑留者のこれからの生活のことが思いやられた。列車に戻ると、各自のリュックサックの大切な物がすべて空き巣ねらいに遭っていることを知った。「警備兵の野郎め」と皆口々に言つていたが、結局、ソ連側輸送司令に実情を訴えても泣き寝入りに終わるよりな

かった。

満州を出て二十日くらいになるだろうか、相変わらず行く先は言つてくれない。イルクーツクまではおぼろげながらみんなの知識で知ることができたが、それからは全くわからない。シベリア鉄道を北西に向かつて走っているようだった。

タイセット通過後はもっぱら西の方向に走っているのがわかった。やがてクラスノヤルスク、ノボシビルスクと走り続ける列車は、ここから太陽の光を列車の右側に受けるようになった。ということは「南の方向」に走っていることになる。シベリア鉄道本線を左折し、支線に入つたらしい。バルナウルの街を過ぎた。もうどこまで連れて行かれようと「どうにでもなれ」と諦めの気持ちになつていた。もう二十四日も乗せられて来たのだから飽き飽きするのも当たり前と思つていた矢先のこと、本部からの伝令で、明日アルマアタという街で下車するから、夜中のことであるが準備しておけということであった。リュックサックにいっぱい、雑囊・飯盒・水筒・防寒外套・防寒帽・防寒靴等持ち

物すべてを詰める。みんな到着の安心感や不安感の交錯する気持ちのようであった。

いよいよ下車。夕刻近く二十分ほど歩いて収容所の門前に到着した。引率してきたソ連兵が五列に並ばせ人員を点呼するのだが、なかなか数え切れない。何回も繰り返しやられるので皆参ってしまった。言葉が通じるなら一言文句を言ってやりたいのだが、じっと我慢の時が流れた。まず入浴の支度を、と通訳から伝えられて準備しようとするのだが、一向に進まない。

収容所は第一、第二と五百人ずつに分かれたが、その場で三時間余りも立ちんぼさせられた。入浴の番が来たので、まず衣類の滅菌消毒からシラミ、ノミの駆除をし、その間にこの前と同じようにバケツ一杯のお湯で垢を落とす。さあ部屋はどこか、小さい建物だ。百人ほどこしか収容できない。

この一夜を眠れないままに明けて、翌日からもう一つの建物に入ることになったが、天井のない建物で、早速修理にとりかかった。通訳の言うには、ドイツ軍の爆撃でやられたそうだ。建築専門の兵たちによって

修築され、入所することができて喜んだ。

三日目から早くも仕事（ラポート）で、「働かざる者は食うべからず」、ノルマパーセントの歩合によって食券が配布されるのだから怠けることができない。私たちの収容所は第二収容所で、ここでの第一中隊として鋳物工場の作業に従事することになり、毎日片道十キロメートル、朝六時起床、七時出発であった。

朝食は世話なしだ、昨晚にあの黒パンを食べ終えているからだ。そして昼めしはスープだけで、大根、玉ねぎ、人参、川魚等、塩と少しの砂糖味のスープ、飯盒の蓋に八分目。夕食まで辛抱しなげりやならない。いつも腹べこだ。

私の工場での作業は主に溶解作業で、経験があったので私には幸いであった。作業員七、八百人ほど働いた。溶解・木型・鋳型・ヌキ・荒仕上・旋盤といった各部門に分かれて作業に従事し、ここでは小さい金槌などの小物の品の製作だった。

あるときはソ連の爺さんと二人で、小さなトタン板の屋根の下でかじ屋仕事を一生懸命やってノルマを一

〇〇%達成。一カ月もする間に「ジャポニーズソルダート・ハラシヨラポート（お前はよく働く、よろしい）」と、偏屈爺さんであるが人気のある方に褒められたのだから、爺さんには好かれたらしい。ここでは個人的な情の触れ合いを見たように思う。

同じラーゲルでの労働先は五カ所ほどあるようで、土木建築、炭坑、コルホーズ、レンガ工場、その他雑事等、ほとんど誰でもできる仕事であるが、屋外での長い仕事で、冬場は零下二十度から三十度になるのだからノルマの達成度は極めて低い。いよいよ十一月、これから七カ月もの本格的な冬がやってくるのだから大変である。

作業のため工場門に整列し人員調べ。これを何度も、私たちには考えられないほど時間がかかる。頭が悪いのではなくて、彼らソ連兵たちの幼少のころからの基本教育の程度が低いのだろう。ソ連邦全体、各共和国の人民の基礎教育の再考を促したい。この時間の無駄と労働者の健康対策、特に体力の消耗の關係について、収容所側担当者に対し善処方依頼してもらおうようお願い

たが、何も応じられなかった。

いよいよ「シベリアの冬」がやってきた。アルマタは中国の西端二百キロメートル北の地点にあり、天山山脈七千メートルの連山を境となす。街から南を眺めれば、雲をはるかに突き抜け万年雪が頂上を輝かせている。いわばその山麓遠く、イシク・クリ湖の北に位置している。私たちの収容所（ラーゲル）二カ所の敷地面積は四百坪ぐらいで八百人は収容できるだろうとされているが、その周囲は鉄条網が張りめぐらされていて、常時、警備兵が自動短銃を肩にかけて目を光らせていた。所内には小さな医務室があり、女医が子どもの玩具のような聴診器を肩にかけて診察してくれるが、必要な薬がなくて、そのころ病気になったら、よほど体力を維持するだけの栄養を与えてくれなければ回復することは少なく、食事は毎日変わり映えない同じ内容のものばかりの連続であるので病気に打ちかつたけの力がなく、倒れ込むことになってしまう。

当時のラーゲル内で発生した病気で診察を受けた事例は栄養失調・下痢・マラリア熱・アメーバ赤痢・肺

病・風邪ひき等々であるが、通訳を通じて対策を願っても、これに応じてくれることがなくて手の尽くしようがないらしく、当時のソ連邦そのものも、戦後の戦勝国であったとしてもすべてのことが疲弊の極にあるらしく、戦利品の中にあるはずの薬品も各收容所に行き渡らないのが実情であったのではなかるうかと私は推測したが、これがために、酷寒に入ろうとするこの異邦の地の果てで尊き命を奪い取られた同僚たちの悲哀断腸の思いは、はかり知れない。

ソ連の道路は大陸的に幅が広いが、アスファルトではなくて玉石が敷かれていた。これは冬の凍結時に歩きよいし、スリップしないのでよいことだと思いが、疲れた足で遠い道を毎日通うのは大変だった。狭いラーゲルはうんざりだったが、作業を終えて帰るのは楽しみだった。

ラーゲルの夜は、各所各部での仕事のニュースが入ってくるので賑わったが、これまでの入ソ以来の生活では何一つ楽しい思いをしたことはなく、昭和二十一年の正月が来ようとしていた。満州で一緒にいた和歌山

と大阪出身の方々が、八〇%ほどまでこのラーゲルの兵隊だったので幸いだった。何かにつけなぐさめ合い、励まし合えたことが楽しいことであり、幸せと思える当時の生活であった。

十二月の暮れになるのにアルマアタ收容所所長から一言の知らせなく、「ソ連では今度の正月の休みはないのかなあ」と所内でも口々に話し合ったが、三十日の夜隊長から、「所長から全員への申し伝えとして、正月は休日で、全員に飯盒一杯のせんざいを馳走として振る舞い、ゆっくり休んで食べてもらう」とのことであった。このことは入ソ以来の特筆すべき所内ニュースであり、そのことを子供のように純心に喜ぶ私たちの姿は、一面には食に飢える畜生道の人間性の姿とも言えるもので、修行道の「六道輪廻」と申して、「地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天」の六界を廻って十界ある残りの「声聞・縁覚・菩薩・仏」の四界あるを忘れて人間生活を行じていることの誤りを自覚しなければならぬのに、抑留生活の実態はまさに「六道輪廻」の連続であって、人間生活でなかったと断言できる。

それほどソ連邦での抑留生活は「ひもじく、苦しい」
ときの連続であった。

空気が凍ってキラキラと輝いていた。シベリアの細水現象の酷寒の中で、ノルマ達成のために無理な労働とその時間の長さ、ラーゲリと作業場の往復の道程の遠さ、加えて給食量と栄養分の不足による体力の消耗が抑留者の生命を日一日と弱めていったことは、人道的にも、当時のソ連邦として歴史的な人尊重の意義からも、六万有余人の現地死亡者への慰霊の現実的責任を追及してゆくことは当然の国民的要求であるから、日本国民総力を挙げてのこの実現こそ二十一世紀以前に完結を期すべき課題である。日ソ間の残されている課題を忠実に、真剣に日ロ両国民の新しい世代、人民・国民への啓蒙の実現を期し、今世紀の責任者相互の価値ある生活創造こそ現実に求められている最大の問題であると思う。まず足元から解決してゆきたい。

これらの問題の解決は、相互の国民の良心的理解による人間的純粹性の相互判断がなければ前進しない。我々が人生の教訓として教えられ、生活に実践し求め

てきた「一つの誠心」こそ、現在の日ロ両国の要職にある方々への最大の根本的要求である。

スターリン時代からゴルバチョフ、現エリツィン大統領と、民族の自我を離れて真剣に話し合ひのできる世代の融和的二十一世紀でありたいと思う。でなければ、私たちの世代にあった人間相互の信義を破り突如満州に侵入したり、長きは十年に及ぶ抑留生活を強制し、ついには数万の死亡者を出し現在もロシア全土に眠る日本人同胞の遺体の痛恨は永久に晴れることなく、両国間の次の世代に悪因縁として残り、国交の正常化は得られないであろう。

私自身、あのアルマアタという土地に收容された間に、野外作業中隊の連中が次から次へと毎日のように死んでいった死亡者の埋葬に参加して、六人のやせ細った先輩の遺体を素っ裸のフンドシ一枚にして、積雪を除きポールもつるはしも打ち込めぬ凍土を三、四時間もかかって命ぜられるままにあえぎながら掘って、重なり合うキャンデーのように埋めたことがある。私たち一等兵、二等兵が死体運び専門の役目になされてしまっ

たような感じであった。「明日は我が身」と思えば経文を唱える者もなく、哀れで悲しい日々が続いたが、そのようなことがあってはならないと、不幸な体験を申し伝えておきたい。

ラーゲルの戸外も室内も四月を過ぎて少し暖かくなると、皆の話題は食事の話、ダモイ（婦郷）の話ばかりで、不思議とセックスの話は絶無と言ってよかった。要するにセックスはその当時の現実生活とあまりにもかけ離れていたからであろう。人間の基本的本能として食欲と性欲が挙げられるが、食欲の方がより深く、性欲の根はそれに比べて浅いのであろう。また食欲は、断食の経験からすると、水に対する欲求の方がより深いということが言えるように思う。性欲は、心に安心感、安全感がないと起こらない現象ではなからうか、その人の心に重なる心配事がのしかかっているときには決して起こらない。シベリアでの生活は本質的には飢餓と切実な未来への不安感という二重苦の圧力で、性欲といういま一つの本能は抑圧されてしまったのである。私たちはラポートをとにもするソ連の共和国内

で数多くの人種とその婦人等とも接する機会があったが、不思議と性的感情を抱くことはなかった。しかし美醜の感覚は、若かっただけにそのままに受けとめてくれたように思う。同じ職場で働いたソ連の女工さんたちの中には、二十歳前後と思われる多分人妻であろう女性であるが、確かに自分を裝飾するのではなくてたくましく美しい人だなと感じたことはあっても、現実生活においては、性的欲求を感じる環境でもなければ時間の余裕もあるはずはなかった。

また二度目の正月がやって来る。いつものように、互いにやせたなあと感じる膝をつき合わせるようにして話すことは帰ることはかりであるが、そのころ、ラーゲル内で「励ましの会」をつくって演芸大会をやるうよということになって、各中隊班内で三、四人ずつの代表を出して演劇、歌謡、漫才等の練習などを始めた。当初は月一回と決めていたのに、第一回の演出が好評であったのもっと早めに催してほしいという声も出てきて、出演者はラポートから除きもっぱら練習に努めてもらうことにしたので、うっとうしかったラーゲ

ル内のみんなに幾分明るさが出てきたようだった。このことは収容所内での楽しみの一つになった。

また一方では、アルマアタ地区での共産教育も活発化してきて、だれが書くのかわからないまま手書きの壁新聞が掲示されて、もっぱら共産主義の宣伝を主とし、日本帝国の天皇制放棄を呼びかける思想的啓蒙文が多く書かれていた。

昭和二十二年三月ごろから食事は粟粥の配給量がこれまでとの倍ぐらいになったが、栄養度についてはあまり信用できなかつた。少しであるが量的には腹を満たす感じを得たようだったが、黒パンの方は別によくなつたような様子は見えなかつた。

私たちの中隊であの恐ろしいアメーバ赤痢が大流行して、私もその一人となった。便所に通うこと教え切れない。この病氣にかかったらまず一カ月入院しなければならぬのに、医務室は前にも述べたように寝るところもなく薬もない。全く苦しい毎日であった。シラミと南京虫に攻められる。私も入院患者であるのに、重態の友が多いので、患者が患者を看護しなければならぬ。

らないありさまであった。今思えば身ぶるいする。そのときに次から次へと尊い命を奪われていった人々の顔、顔、顔が思い出されてならない。改めて心から冥福を祈る。

ソ連アルマアタにも四月の春が訪れてきたかのような気配であるが、まだまだ雪解けが来ない。デマでもよいから、我々の念願であるダモイがもうそう遠くはないであろう、まさにそのこと一つが話題の種類であった。いよいよ春めき、雪解けが始まった。道は泥んこ、とても歩ける状態でない。約一カ月は続くだろうと思われた。

私も一週間ほど病人として過ごし、あまり経過がよくないのにレンガ工場に通うことになったが、誰ともなく今度のダモイ話の様子がいつもとちよつと違ふぞという噂で、すぐにラーゲルに帰れとこのことを告げられた。月一回の女医の診察と、アメーバ赤痢既往症の診断と栄養失調度の検査を兼ねての診察と思っていたが、私の腰部や腹部の皮下脂肪をひねって「ネーハラショー、ダモイ」とその場で言われ、内心喜びいっぱい

いであつた。しかしその後一向に知らせがなく、まただまされたかと思つていたが、後日、中隊長から正式に通達があり、万歳を叫びたい気持ちに思わず拳を握り、うれし涙をこらえた。

アルマアタ収容所では、各班百人として栄養失調度の高い者からということ編成され、十キロメートルばかり離れた小さな収容所に集結し貨車に乗ることになるらしい。この収容所へは各地から大勢集結し、三日目いよいよ出発であつた。この日、収容所の所長が別れのあいさつに来ていたが、なぜか不思議にもあのとときに彼を「憎たらしい奴」と思わずに別れてきた。憎しみよりも、いよいよ本当にまぎれもなく我が故郷、日本に帰れるのだという喜びがこみあげ、どの列車にも皆の明るい表情でいっぱいであつた。

道中のシベリア本線は四月というのに深い雪が残つていた。列車は確かに東の方に走つていた。今度は何日かかろうと不安感はなく、確かに故国に帰れるのだという安心感いっぱいであつた。ダモイ列車はもう一週間にもなるうか、まだあのバイカル湖は見えないな、

夜のうちに過ぎてしまったのだろうかなどと話し合つていたとき、広い野原で停車。前から伝達があり、今から三時間停車という。食事は一口三回分を与えられた。

このダモイ列車にはソ連側から十人ほどの看護婦が随行し、看護のためにと各車の体調のよくない人たちを見回つていたようだが、それはほんの口実で、彼女たちも若い警備兵らも気楽な官費旅行だから、互いに相手を選んで戯れに大胆なポーズでセックスを見せつけられることたびたびであつた。

機関車もでたらめ運行と思えるような走り方であつたが、二十日あまりを要してナホトカに着いた。食事は与えられず砂浜で野宿した。日本海を渡ってくる風は、私たちには心地よいものに感ぜられた。

翌日朝九時ごろに収容所に入れられたが、そこで最初に意外な感じを受けたのは、収容所の門の所にソ連兵がおり、所内の管理はすべて日本人であることだつた。彼らは我々帰還者に熱心に厳しくソ連共産党の思想を徹底して教育することに精魂を打ち込んでいた。

成績のいかんによってはまた送り返されるという厳しい規則があるという噂が何となく流れてきた。ここでは簡単な天幕張りで短時間の睡眠しかできず、各種の使役が次から次へとあり、それに毎夜、革命歌や労働歌を元氣よく大合唱しなければ絶対に認められず、寝させてもくれなかった。やっとナホトカでの民主教育という教育を卒業できたようで、私は運よく乗船できることになった。

船名は「恵山丸」と記憶しているが、乗せてもらったがなかなかに出港しない。二時間は過ぎただろう、何でも員数が合わないらしい。例によってソ連側の数に弱い民族の姿を露呈したひと時であったようだ。太陽が水平線に沈むころ、静かな日本海に汽笛が鳴り響いた。さあ出港だ、もう二度と来ることはないソ連、そのナホトカの港に深い深い感慨を込めて「さようなら」の手を振った。船内に入ると、皆踊り上がっていた。長かった労苦の抑留生活を思い、今夜はこのうれしさに寝る者はいなかった。

夜明けごろ、かすかに日本列島が見える。船は静か

に徐行しながら港に近づいていった。田畑は青々とし、内地の松のきれいなこと。いよいよ「命ながらえて」の上陸だ。旧海軍軍港舞鶴に上陸、援護局の職員や看護婦の皆様のお迎えの一言は今なお脳裏に深く焼きついて「忘れない言葉」ですし、生死を踏み越えて三年ぶりに母国の土に帰国第一歩を記録することができたことも、朝早くから婦人会の方々の心のこもった接待のことも、また畳の上で白い米のご飯をいただいたことやあの大きな湯船に全身を埋めて首までつかった三年ぶりの風呂の感触など、一つ一つ忘れられない感激として残る思い出である。

すべての復員手続きを終えて、翌日、帰宅の旅費、食事代を含めて三百円也をもらって、大阪經由紀勢線で道成寺で下車し我が家に帰った。父や母、姉妹、みんな涙して私の帰りを喜んでくれたが、兄儀造の戦死の公報が入っていたことを聞かされ、私は大きなショックで心が痛んだ。その当時の父母の悲しみは大変なものであったろう。その悲哀にたえて私の帰りを待っていてくれた父母は、今さらに残されたただ一人の男子

である私の帰りを心の底から喜んでくれたのだった。

復員後の私の体調は栄養失調やアメルバ赤痢の後遺症で回復には六カ月を要したが、いよいよ私の第二の人生であると決意して必死に家業に励み始めた。二十三年より父の家業である農業を戦死した兄にかわり受け継ぎ五十年、柑橘出荷業四十年。その間、保険外交員五年、育友会会長を五カ年、地域役員を四カ年、関西相互(株)嘱託十五カ年、御坊市企業連合会役員十八年、熊野神社の総代五カ年、小学校同窓会会長八カ年で現在に至っている。当年七十一歳になったが、四年前の診察の結果、慢性肝臓炎が肝臓がんと判明して六〇％を切除した。その後回復して、元気に楽しい日々を送っている。

目が覚めてみれば嬉しや今日も亦

此の世の中の人と思えば

(平成八年八月、自分史出版に当たって)

【執筆者の紹介】

経歴

大正十三年六月二十一日 日高郡野口村一、二九二

番地に生まる(現在、御坊市野口

一、二九〇番地)

昭和十四年三月 野口尋常高等小学校卒

五月 大蔵省大阪造幣局に勤務

五カ年を経て退職

昭和十九年 徴兵検査 第一乙種合格

昭和二十年一月 現役兵として博多集結

博多出港、釜山港上陸、朝鮮半島

縦断 鴨緑江通過

三月 満鉄に入り、浜江省哈爾濱^{ハルビン}第十八

野戦兵器廠第二六三五部隊教育隊

入隊

昭和二十年六月 下士官候補、陸軍一等兵昇進

勉強のため孫呉に移る

北安出張所に転属

伊利久得出張所へ転属

八月八日 伊利久得出張所撤収

十六日 富拉爾基着、天皇の詔勅のこ

とばを聞く

十八日 武装解除後、齊齊^{チチ}ハル^{ハル}へ

齊齊哈爾野砲隊、扎蘭屯に移

動、野宿

九月下旬 シベリア行 貨車にて二十五

日間、カザフスタン共和国ア

ルマアタ下車 第二收容所軍

備工場鑄物作業外、各種作業

に従事、約二年余り

衰弱のため帰国

昭和二十二年五月 ナホトカで恵山丸に乗船

五月二十日 舞鶴港上陸、復員

昭和二十三年より五十年、農業と柑橘出荷業。この間、保険外務員五年、野口小学校育友会会長五年、同校昭和十二年卒業生同窓会会長八年、部落会四四年、関西相互囑託十六年、御坊市企業連合会役員十

六年、熊野神社総代五カ年等歴任。

右のとおり出口氏の今日までの経歴の概要を述べてまいりましたが、私としては、個人的な面識はない方でありました。幸いなことに平成八年八月、同氏が「私の一代自分史」として戦争を知らぬ子孫末代のために書き残したいお気持ちから自費出版された二百ページ、約十万四千字に及ぶ一冊の書籍を小生に恵贈いただきました本の中に、ご本人の姿を写真として残してくれていたのです、あらましの想像で認識することができたような次第です。温厚な人柄であり、社会的貢献心に富み、行動的な方であると聞き及んでおります。ただ誠に惜むらくは、平成九年四月一日、四年前の既往症「肝臓がん」六〇％切除の再発のためであったのか、他界されたと聞きました。何がゆえに、旺盛な生命力で抑留生活の労苦を越え、復員後の有能にして行動的な性格をもって社会に尽くしてきた実績ある人の命を奪うのでありましようか。寿命というか宿命というか、「病氣と寿命は別だ」と聞かされてきてい

ますが、出口氏の他界は残念でなりません。

出口為治郎氏の遺稿を抜粋申し上げて、御他界を悼み、供養、回向の気持ちを捧げるものです。

(和歌山県 橋本 義治)

私の抑留記

島根県 田中勘助

一、満州国へ渡満

私は、山の中の平和な農村だった島根県の田所村に農家の長男として生を受けた。大正十二年十月三日、関東地震の直後である。尋常高等小学校を卒業するまで両親のもとで順調に生育して来た。しかし学校を卒業する頃から世の中は怪しくなっていたのである。父が農林学校に行くかと言うが、農業は嫌だし、家の方もあまり裕福でもないので断り、祖父のすすめた役場の小使として就職。その頃からよく召集令状の赤紙が来るようになった。

役場勤めは嫌いだった。都会に出てみたかった。密かに想いを寄せていた彼女が満州に行ったと聞いた。当時は満州国を理想の地として盛んに宣伝していたので自分も憧れてしまっていた。両親が世話していた近所の叔母さんが満州にいたので手紙を書いてみた。何と書いたか忘れたが、多分行きたいとでも書いたのだろう。折り返し主人の名刺「協和会職員」を入れて「協会に就職出来るから来ないか」と返事が来た。最初父は反対していたが、「行ってみるか」と、自分で世話した人切な子牛を売った代金で旅費を出して、縁故者である大屋さんという島根開拓団の団長さんがたまたま奥さんを迎えに帰られたと聞き、連れて行ってくれるように頼んでくれた。そして広島駅まで送ってくれた。本当に済まないことをしたものだ。ホームまで出て、乗車し窓からのぞく自分の所に来て、発車ベルが鳴り始めると「困ったらいつでも帰ってこい、悪いことはするなよ」と言う。熱いものがこみあがってきて、ワーンと泣いてしまったが、父こそさぞ切ない気分だったろう。生涯忘れることのない思い出だった。